

自己評価方法について

- 1 年度当初に部署・担当(各部・学年・教科など)ごとに本年度の実践目標を立てる。
- 2 目標に沿った取組を展開する。必要に応じて軌道修正をしながら取組を進める。
- 3 年度末に部署・担当ごとに成果をまとめる。
- 4 成果を踏まえながら、全教職員による評価を行う。  
それぞれの実践目標に対して、次の4つの尺度で評価する。その平均値(評価表の右端の数値)を目標ごとの自己評価とする。

領域	評価の観点	評価項目	番号	実践目標と成果	評価
学校運営	総務	家庭や地域への情報発信	1	<p>実践目標 オープンハイスクール・学校説明会の実施、ならびに総合理学・探究科説明会や予備校・塾の説明会等を通じて、中学生やその保護者・地域へ情報を発信し理解を深める。</p> <p>(成果) OHSは、警報のため1回のみ実施となったが、学校説明会では3年生のみに参加者を絞って実施した。塾や中学校にも説明に出向き、学校の情報を発信することができた。また、自治会を中心にPVを作成し、高評価を得た。</p>	3.7
			2	<p>実践目標 学校要覧や学校案内の内容を改訂する。さらに、各分掌の協力を得て、規定集や内規・申し合わせの見直しを図る。</p> <p>(成果) 時代に合わせた見直しを実施した。</p>	3.2
		3	<p>実践目標 導入されたグループウェアを活用して、職員朝礼の連絡事項や行事予定などの情報の共有を図る。</p> <p>(成果) 朝礼の連絡事項は毎日変更し、行事予定も滞ることなく伝え、情報の共有を図ることができた。</p>	3.3	
		4	<p>実践目標 海外姉妹校の訪問や受け入れを通して、相互理解を深め友好親善を推進する。また学校の国際交流事業の取り組みを全校生にも紹介し、理解を深める。</p> <p>(成果) 海外姉妹校との交流はできなかったが、台湾の高校生徒のGoogle Meetを使つての交流はでき、互いの理解を深め、友好親善を推進することができた。</p>	3	
		5	<p>実践目標 防災避難訓練を実施し、人命尊重の精神と安全確保の意識を高め、災害発生時には適切な行動ができる能力を高める。</p> <p>(成果) シェイクアウト訓練は計画通り実施できたが、防災避難訓練は雨天時の計画でHRを通じて行い、人命尊重の精神と安全確保の意識を高めることができた。</p>	2.8	
		6	<p>実践目標 生徒の自主的委員会活動を支援し、生徒購入希望本の配架や教師推薦図書案内などを積極的に進める。また、生徒作成の「らいぶ」や「図書館報」により読書への意欲を高める。</p> <p>(成果) 生徒の自主的な委員会活動を継続し、図書採択委員会で検討しながら図書をさらに充実させた。</p>	3.4	
		7	<p>実践目標 探究活動やディベート等による表現活動の支えとなるよう、図書館等の資料の充実・環境整備に努める。</p> <p>(成果) 図書館等の資料の充実、図書館PCの利便性の向上に努め、探究活動等でより円滑に生徒が利用できるように工夫した。</p>	3.3	
	教務	生徒自らが学び考える力の育成	8	<p>実践目標 新学習指導要領に基づき、2022年度からの教育課程を生徒の実態に応じて編成する。</p> <p>(成果) 一昨年より校内でカリキュラム小委員会を設けて行ってきた準備を受けて、令和4年度入学生のカリキュラムを決定することができた。今後の状況の変化に応じて手を加える余地はあるが、新課程においても本校の実態に即した効果的な学びを実現するための基本枠ができた。</p>	3.3
			9	<p>実践目標 校務支援システムを適切に運用し、教務関連作業等の一元化・正確化・効率化を図る。</p> <p>(成果) 校務支援システムをより円滑で適切に運用すべく学年教務係と連携しながら業務に取り組んだ。効率化の点で考査の自動採点システムの利用の仕方について職員に広く知ってもらう取り組みも行った。</p>	3.2
	進路指導	進路指導体制の充実	10	<p>実践目標 前年度の進路状況について、進路指導部がその結果を分析し、職員進路研修会を実施して、全職員に提示し、今後の進路指導について研修する。さらに、3年生は、出願検討会議(12月)、共通テスト後出願会議(1月末)を行い、学年・進路指導部で検討を行う。</p> <p>(成果) 5月に新旧3年情報交換会を行い、2021年度入試の分析と本校生の指導に関する情報を交換した。6月の進路指導研修会では、76回生1年基礎学力考査の結果に基づいて過年度比較及び教科ごとに設問別の分析を行い、更に2021年度入試の大学別合格結果について職員間で情報を共有した。3年生については、12月と1月に2回の出願検討会議を行い、生徒個々の出願指導について検討した。3学期には、大学入学共通テストの結果をふまえて問題分析及び出願動向を含めた指導経過及び結果を示し、次年度に向けての指導方針を共有する。</p>	3.7
			11	<p>実践目標 実力考査や模試の結果をもとに、毎回検討会議を開き、生徒の学力の現状を分析し、各教科が今後の授業等の指導に生かす。</p> <p>(成果) 実力考査ごとに検討会議を持ち、(1,2年は年3回、3年は5回)、生徒一人一人の成績から各教科として取り組むべき課題や生徒の弱点を把握し、その後の指導に参考となる情報を共有した。</p>	3.6
		進路意識の向上	12	<p>実践目標 生徒のキャリアアップの一環として、京大・阪大・神大の入試課の大学の職員を招き大学説明会を実施する。また、卒業生を中心に、大学生・大学教員を招き話を聞くことで、進路の目標を明確にし、またその実現に向けてどんな道筋や方法があるのかを考えさせ、より強い進路目標の設定の手助けとする。</p> <p>(成果) 7月には大学入試課の職員を招き、文系学部説明会を行い、更に予備校の講師を招き保護者及び生徒対象の医学部医学科説明会を実施し、引き続き11月には医学部系統の面接指導をグループ別に実施し目的意識を高めるとともに今後の対策を学んだ。例年実施しているキャリアアップセミナー(卒業生による在学している大学・学部のプレゼンテーション)は、コロナ禍で、9月実施はできず、3学期に実施を予定している。</p>	3.5
			13	<p>実践目標 3年生には、「自己実現」を配布し、1,2年生には、学年集会において、学年進路指導部の協力のもと、生徒に進路情報を提供する。保護者には、保護者会やPTA進路研修会を実施して進路情報を提供し、生徒・保護者の進路意識を高める。</p> <p>(成果) 進路決定の方針や進路に関する情報を中心に3年生向けの進路通信「自己実現」を年間約30号発行した。「自己実現」はホームページにも掲載し、保護者にも情報を提供した。また、6月にはPTA主催の入試に関する研修会(希望保護者・生徒対象)を行い、大学入試の現状と今後の課題について情報を提供した。保護者会については、3年生で2回(7月・12月)、2年生で2回(10月・3月)、1年生で1回(10月)実施し、各学年に合わせた入試情報や進路意識を高める話を行った。</p>	3.7
		主体的な進路選択能力の育成	14	<p>実践目標 「進路ロングホームルーム」を通じて「進路のしおり」の発行や、資料を配付して、職業や大学を計画的に調べさせ、自己認識を深めさせるとともに必要な進路情報を収集し進路選択能力を育てる。</p> <p>(成果) 1年では、1学期のロングホームルームで、職業、学部を研究し、2年は大学の入試科目の研究を行った。さらに1,2年生とも学年進路担当者が中心となって「進路のしおり」を発行した。</p>	3.4
15	<p>実践目標 各大学から送付されたり、訪問者が持参する資料を整理、開放して、生徒が閲覧・活用しやすいように進路資料室や進路資料掲示板(進路資料室前)の環境を整える。</p> <p>(成果) 各大学からの資料を、生徒が閲覧、活用しやすいように整理して進路資料室を整えた。さらに、進路資料掲示板(進路資料室前)にどの学年の生徒も持ち帰れる大学情報資料を設置した。進路資料室の放課後の利用率も増えている。</p>		3.5		

領域	評価の観点	評価項目	番号	実践目標と成果	評価	
生徒指導		伝統行事の自主的立案と全校生徒の積極的参加の推奨	16	実践目標 伝統行事の自主的立案と全校生徒の積極的参加を奨励し、学校全体を活性化させる。 (成果) 昨年同様にコロナ禍のきびしい制約の多い中であったが、自治会執行部のリードのもと、可能な伝統行事については検討を重ね、成功させることができた。	3.5	
		自治会の自主的・自治的運営能力の育成	17	実践目標 アゼンブリー、三人行事に関するフリーターキングの活性化を図る。 (成果) 三密対策のため放送アゼンブリーが多く、フリーターキングも実施が大変であったが、生徒にそれぞれの意義を認識し、参加する姿勢を持たせた。	3.3	
			18	実践目標 リーダーの育成、上級生が後輩を正しく指導する気風を支援する。 (成果) 本年もリーダーを育成するさまざまな行事が中止になるなど従来とは異なる環境ではあったが、自治会執行部や協議会など各部署で引き継ぎの機会を持ち、上級生に下級生を指導させることで円滑な仕事ができるよう努めた。	3.3	
		生徒の内面理解を図る生徒指導	19	実践目標 教員相談委員会との連携を密にし、生徒の正しい理解・情報の共有をはかる。 (成果) 管理保健部などとの連携を図りながら、また学年には生徒アンケート実施等の協力を得て、全校生徒が充実した学校生活を営めるような環境作りを心がけた。	2.9	
		問題発生時の危機管理態勢の確立	20	実践目標 問題行動発生時に対するマニュアルを作り、それを教員全体で理解・徹底させる。 (成果) 問題行動が発生した際の職員の動きや、対処する際の書式等を確認した。	2.7	
学	管理保健	教育相談体制の充実	21	実践目標 教職員のカウンセリング・マインドを深め生徒理解の資質を高める。支援を必要とする生徒に対しては、特別支援委員会・教育相談委員会を開催し、支援体制作りや職員全体での共通認識を図り、問題解決に向けて保護者および関係機関との連携を図る。 (成果) 本年度から今本カウンセラーが着任し、2名のカウンセラーで年間26回のカウンセリングを企画し、生徒や保護者の支援を行っている。また、教職員に対して年2回カウンセリングマインド研修を実施、第1回ははじめをテーマとした配信講義の伝達講習、第2回はカウンセラーによる発達障害についての講義を開催した。教育相談委員会では、定期的に会議を行い、教職員間での情報の共有し、個々の支援について検討している。	3.3	
			22	実践目標 長期休業前に運動部の生徒を中心とした、生徒や教職員を対象に救急法講習会を行い、心肺蘇生法(AED使用法を含む)および応急手当の知識・技術を習得する。また、熱中症の予防・対応をはじめ、必要な応急処置について学ぶ。 (成果) 7月に、明治国際医療大学救急救命学科より講師を招いて、救急法講習会を開催した。新型コロナウイルス感染症の予防対策として、生徒と職員の研修を別の時間帯にし、研修内容も感染リスクを減らすよう工夫した。	3.4	
		安全教育の充実	23	実践目標 日常掃除の見直し・掃除場所の見直しを図り、美化の充実・徹底を図る。 (成果) 日常掃除に必要な備品を注文し、適切な場所に、必要に応じて配置した。	3.1	
			24	実践目標 グローバル人材育成をめざし、コアになる力としての「問題を発見する力」「未知の問題に挑戦する力」「知識を統合して活用する力」「問題を解決する力」、ベリフェラルとしての力としての「交流する力」「発表する力」「質問する力」「議論する力」の8つの力をよりよく伸張するための授業改善を図る。 (成果) 本年度は予定していたカリキュラムを予定どおり実施できた。本校作成のサイエンス入門の実験書を来年度の改定に向けて改良し実施した。各教科においては現在ある実験機材や発展的内容を盛り込んだ教材を活用して充実した授業を展開した。	3.5	
		教育環境の向上と美化活動の推進	25	実践目標 交流・議論・発表等を軸とした生徒の主体的・協働的な研究活動・探究活動の効果的なカリキュラムの開発とその実践を行う。 (成果) サイエンス入門・課題研究では外部人材を活用し、交流・議論を行う中で生徒の主体的・協働的な研究・探究活動を年間計画通りに実施した。総合的な探究の時間では、神高探究に名称を変更、生徒が自ら課題を設定し探究を進める探究活動を実践し、理数系の探究分野を「サイエンス探究」と位置づけ、SSHの対象として活動の支援を行った。	3.6	
			26	実践目標 在校生とその保護者に対しては、保護者会やSSH通信や神戸高校ホームページを活用して広報をおこなう。また、中学生とその保護者には、総合理学科説明会や校外での説明会で、学科の特色や魅力を説明し、理解を深めてもらう。 (成果) 総合理学科説明会を実施し、3年生総合理学科の生徒からの説明も実施し、中学生とその保護者に広報活動を行った。校外での学科説明会も行い、在校生やその保護者だけでなく説明会に参加した中学生やその保護者にも神戸高校ホームページを紹介、SSH通信(約月2回発行)などSSH活動についての広報を行い、神戸高校ホームページへのアクセスを促した。	3.6	
校運	総合理学・探究	総合理学科のカリキュラムの充実	27	実践目標 神戸高校サイエンスアドバイザーなど外部人材の活用で人材育成の効果をさらに高める。SSHの取組で得られた成果を普通科生徒や県内他高校へ波及させる。科学技術人材育成に係る実践事例として、Webページを利用しその取組を全国に情報発信する。 (成果) 科学英語・科学倫理等の授業、課題研究・サイエンス入門・神高探究等の探究活動、SSH特別講義において、リモートも含め外部人材を活用して人材育成の効果を高めた。校外の施設での研修がまだ困難であるため、校内でのSSH特別講義やSSH実験会を数多く実施、全校生が参加できる企画として実施した。SSH普及のWebページをさらに充実させ、閲覧数も順調に増加、全国へのSSH事業の成果普及を果した。	3.6	
			28	実践目標 神戸高校生としての自覚を持たせ、基本的な生活習慣と礼儀・マナーの確立を図る。生徒の現状を把握し、家庭との連携を密にして、生徒の個別対応を大切に指導を行う。 (成果) 新入生オリエンテーション、学年集会、HR等で神戸高校生として意識していきたいことを伝える。年度当初や夏の三者面談、必要に応じて面談を行い、個別対応の成果をあげている。	3	
営	総合理学・探究	SSH事業の推進と成果の全国への普及	29	実践目標 中学時の意識を切り替えて、神戸高校の授業に慣れさせる。そのために、適切な課題に取り組みせたり、予習・復習を習慣化させる。個々の学習目標を意識させ、個々の状況に応じた自主的で主体的な学習のあり方についても考えさせる。 (成果) 28の項目に加え、世話係の先輩から神戸高校生の生活や学習についての経験談を教えてもらい、各自の活動に活かしている。週末課題や考査前、長期休業中に適切な課題を与え、成果をあげている。	3.1	
			30	実践目標 学習と合わせて、部活動や学校行事に、自主性・自律性の涵養を図りながら意欲的に取り組み、一人一人が生きてきた学校生活を送れるよう適切に指導・助言を行う。 (成果) 複数の部活に入部するものも含め、部活動の加入率はかなり高い。また学校行事をはじめ大きな活動に取り組む前後にポートフォリオを書かせることにより、意欲的・意欲的に取り組み、また振り返ることで成果を上げている。	3.2	
1学年			28	実践目標 神戸高校生としての自覚を持たせ、基本的な生活習慣と礼儀・マナーの確立を図る。生徒の現状を把握し、家庭との連携を密にして、生徒の個別対応を大切に指導を行う。 (成果) 新入生オリエンテーション、学年集会、HR等で神戸高校生として意識していきたいことを伝える。年度当初や夏の三者面談、必要に応じて面談を行い、個別対応の成果をあげている。	3	
			29	実践目標 中学時の意識を切り替えて、神戸高校の授業に慣れさせる。そのために、適切な課題に取り組みせたり、予習・復習を習慣化させる。個々の学習目標を意識させ、個々の状況に応じた自主的で主体的な学習のあり方についても考えさせる。 (成果) 28の項目に加え、世話係の先輩から神戸高校生の生活や学習についての経験談を教えてもらい、各自の活動に活かしている。週末課題や考査前、長期休業中に適切な課題を与え、成果をあげている。	3.1	
			30	実践目標 学習と合わせて、部活動や学校行事に、自主性・自律性の涵養を図りながら意欲的に取り組み、一人一人が生きてきた学校生活を送れるよう適切に指導・助言を行う。 (成果) 複数の部活に入部するものも含め、部活動の加入率はかなり高い。また学校行事をはじめ大きな活動に取り組む前後にポートフォリオを書かせることにより、意欲的・意欲的に取り組み、また振り返ることで成果を上げている。	3.2	

領域	評価の観点	評価項目	番号	実践目標と成果	評価
学 校 運 営	学年 経営	2学年	実践目 標	授業を中心に据えて予習・復習を習慣化させることで、基礎学力定着の徹底を図る。「知識」を「知恵」に昇華させ、「深い学び」を追求する姿勢を身に付けさせる。	3.1
			(成果)	予習復習を習慣化し、課題提出や小テスト等を積極的に取り組ませることにより、学習習慣が身につく、基礎学力の定着が図られつつある。夏休みを中心に補習を行い、学習意欲を高める指導を行い、成果を上げている。	
		実践目 標	自治会や部活動など学校生活を推進する面で、中核となる学年であることの自覚を持たせる。「自重自治」の精神に基づいてリーダーシップを発揮できるよう、また他者との共生の精神を培うよう指導する。	3.5	
		(成果)	学校行事や部活動において、学校の中心として活躍し、中核学年としての自覚が見られるようになった。園遊会や体育大会、音楽会、修学旅行などの行事を通じて、リーダーシップを発揮できる者が多くなった。		
		実践目 標	集団活動・個人活動を問わず、あらゆることに積極的に取り組み、社会の変化に対応する能力や態度の育成を図り、助言・指導を行う。	3.2	
		(成果)	神高ゼミや課題研究などで、探究活動にも積極的に取り組み、社会の変化に対応するための様々な能力や態度・姿勢の土台となるものを培った。ポートフォリオを継続し、機会があることに学習活動や行事の記録をとることを習慣づけた。		
	3学年	実践目 標	最高学年としての責任感をもって、諸学校行事に取り組ませる。本校の教育活動を大切にして、神高生として相応しい学校生活を心がけるように指導する。	3.6	
		(成果)	自治会を中心に、できる範囲での改革を行った。制限のある中で、積極的に行事に参加した。		
		実践目 標	ウイークエンドセミナーや学期中・夏季休業中の補習の実施、などによって自主的な学習態度を育成し、学力の飛躍的向上を図る。3学期の学習の支援を行い、学力の更なる向上を図る。	3.7	
		(成果)	補習期間の途中で断念する生徒も少なく、最後まで努力する生徒が多かった。早朝や休日でも学校で勉強する生徒が多かった。		
		実践目 標	個人面談や三者面談を通じて、「自身が大学で何をなすのか」について考えさせた上で希望進路を確定させ、「第一志望大学合格」の意志を定着させる。進路保護者会や「自己実現」の発行を通して入試制度や大学の情報を知らせ、保護者の協力と理解を得て、第一志望校への出願を図る。	3.7	
		(成果)	希望校がぶれる生徒もいたが、大半は各自の目標に向かって努力した。保護者会の参加者も7割を超え、情報が伝達できた。		
課 題 教 育	人権 教育	人権教育推進体制の確立と人権教育の推進	実践目 標	人権教育をホームルーム活動をはじめとして全ての教育活動に位置づけ、全教職員で取り組む	2.9
			(成果)	複数回の人権アンケートを行い、生徒の状況把握に努めた。コロナ禍のなかで講演会や映画鑑賞はソーシャルディスタンスを取り、各学年ごとに行い、人権意識の向上を促進した。	
	情報 教育	情報活用環境の整備とICT機器の活用支援	実践目 標	教育実践の効果を高めるために、情報を活用する環境を整備し、ICT機器の活用を推進するとともに、技術的な支援を行う。	3.2
			(成果)	今年度もネットワークの設定変更や機器の導入が続いた上に、セキュリティに関する規則が強化され、校内における教育以外の業務が増加した。年度の前半は、昨年のネットワーク事業の弊害として工事後に機能しなくなっていたHR教室や他の教室のS系ネットワークの修復を完了させることができた。しかし10月以降は、残念ながら情報活用環境の整備に費やす時間が十分に確保できず、全体的な整備に関する支援は滞ったが、各教師や部署で生じた不具合や問題についてはその都度対応した。	
特別 支援 教育	特別な配慮を必要とする生徒への支援	実践目 標	日常授業や特色ある学校行事の主たるものをWebなどで広報する。	3.4	
		(成果)	本校Webの発信回数は(複数記事の同時発信も1回と数えて)、計138回(2021年1月から12月まで順に10回、11回、9回、14回、9回、17回、14回、18回、8回、8回、11回、9回)であった(昨年は144回、一昨年は100回)。今年度も昨年度と同様にコロナウイルスの影響で、Webを利用した情報提供の役割は大きかった。緊急時に活用できるシステムをめぐって課題研究で作成した「連絡掲示板」は修学旅行でも活用され、自治会もWebでの情報発信を実施し、「SSH成果の普及サイト」も効果を上げている(分析はSSH報告書に掲載)。		
国 語	国語	実践目 標	生徒の実態把握や具体的な対応策の検討により、教職員の実践力を高め、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた合理的配慮ある支援を行う。	3.2	
		(成果)	隔週で特別支援委員会・教育相談委員会を実施した。学年間での情報交換を通して、生徒指導上の支援・配慮を要する生徒や、別室受験への対応など、個に応じた支援を行った。		
		実践目 標	論理的な文章の読解を通じて、思考力・判断力を養う。また文学的な文章の鑑賞を通して豊かな心を育てる。	3.4	
	(成果)	教科における学習活動全般を通じて、論理的な文章や文学的な文章を読解するために必要な国語力の定着を図るとともに、さまざまな領域に関する思考を深め、多様な表現を味わうことで、活発な言語活動を引き出すことに努めた。			
	実践目 標	古文・漢文読解の基本となる知識の定着を図りつつ、さまざまな作品にふれることを通じて、古典への関心を育てる。	3.5		
	(成果)	教科における学習活動全般を通じて、古典の基礎的な知識や読解力の定着を図るとともに、多くの作品を読むことを通じて古典に親しみ、古典を尊重する態度を身につけさせることに努めた。			
	地理歴史・公民	実践目 標	現代をよりよく生きるために、政治・経済の仕組みや、現代世界の理解を深める。学習を通じて、基本的な知識を身につけ、物事を見つめる力を育てる。	3.3	
		(成果)	講義形式で基本的な知識を身につけるだけでなく、調べたり議論をしたりする取り組みを実施し、テーマを設定して多角的に現代の課題を考察させることができた。		
		実践目 標	日本の歴史、世界の歴史を学び、現代社会における国際問題を考える基本知識を習得する。	3.5	
(成果)	講義形式の授業を中心に演習を加えながら、基本知識を習得した。ICT機器を活用し、地図や資料など必要な情報を提供して、わかりやすい授業を実施し、理解を深めることができた。				
実践目 標	日本の社会・風土の理解を深めるため、各国の自然環境・社会環境を学び、基本知識を習得する。	3.5			
(成果)	講義形式の授業を中心に演習を加えながら、基本知識を習得した。ICT機器を活用し、必要な情報を提供することで、理解を深めることができた。				

領域	評価の観点	評価項目	番号	実践目標と成果	評価	
教科領域	数学	46	実践目標	数学的な考え方を身につけさせ、生徒が主体的・能動的に学習する態度を育てる。	3.2	
			(成果)	生徒が興味をもつような補助教材を用意したり、ICT機器やG Suiteなどのアプリケーションを用い、生徒が主体的に学び考え、能動的に発表・意見交換ができる授業を展開した。		
		47	実践目標	生徒の進路・能力・適性に応じた授業・補習・課外活動を実施する。	3.4	
			(成果)	3年では、2学期から一部の授業では能力別・進路別のクラス分けを行った。1、2年でも生徒の学力にあわせた授業・補習・補充を行った。また、数学オリンピックの指導も行った。		
		48	実践目標	生徒が興味・関心・意欲を抱けるような教材・教具を工夫し活用する。	3.3	
			(成果)	数学的に内容の深い発展的な教材を提示し、数学的な好奇心を喚起した。また、ICT機器やタブレットを用いて、図形や関数を、動的に表現することで、興味関心を抱けるようにし、理解を深めることができた。		
		保健体育	49	実践目標	スポーツテスト等を実施し、生徒が自己の体力の現状を知ることにより、3年間を通じて体力の向上を図る。	3.3
				(成果)	男子1.5km、女子1.2kmの距離を毎授業で走り、記録することで、自己の調子や体力の現状を知ることができた。それぞれの選択した種目を実践することにより、技術と共に、昨年度のコロナ禍での休校期間に落ち込んだ体力の向上を図ることが出来た。取り組みの成果をスポーツテストによって客観的に知ることにより、新年度へのそれぞれの目標設定がしやすくなり、3年間通じての体力向上へとつなげることができた。	
			50	実践目標	選択種目を通じて生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる。	3.1
	理科	51	実践目標	自作プリント教材を活用した授業実践と授業内容の工夫を行い、基礎学力および応用力の向上を図る。	3.3	
			(成果)	基礎的な内容については、小テストも取り入れて、定着をはかった。また、生徒の学力実態に合わせ、発展的な内容も盛り込み、学習させた。		
		52	実践目標	実験・観察を行いレポートを書かせ、知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力の向上を図る。	3.4	
	53	実践目標	工夫された教具、ICT教材等を活用し、科学・技術に対する幅広い興味・関心を持たせる。	3.4		
		(成果)	パソコン・タブレットを用いて、動画や資料を見せることで、視覚的にも理解を深めた。また、演習の授業では、クリッカーを用いてクラスメイトと解答を共有することにより、理解度をその場ではかり、生徒の理解に合わせた授業を展開できた。			
	芸術	54	実践目標	生涯にわたって広い視野に立った芸術との関わりを大切にしようとする心情を持ち、実技・実習等幅広く主体的に取り組む姿勢を育てる。	3.3	
			(成果)	限られた時間数の中で、教材を精選し内容を工夫するように努めた。どの教材にも興味関心を持つ生徒が多く、積極的な姿勢で実技や実習に取り組み、活発に活動できていた。		
	外国語(英語)	55	実践目標	教科指導を通して、国際感覚を持った人材育成に努める。	3.2	
			(成果)	世界の様々な社会や文化に関する文章を英語で読ませることを通じて、幅広い考え方を身につけさせるよう努めた。また様々な文化的背景を持つ人々とのやりとりを想定した言語学習をさせることにより、国際的なコミュニケーションについて考えさせた。		
		56	実践目標	生徒のニーズに配慮した授業や個別指導を通して、学力の向上と定着を図る。	3.4	
			(成果)	ICTや補助ハンドアウトも活用して理解を深めさせ、個々の生徒のニーズに配慮するように努めた。また英作文を中心に個別指導を進めたり、定期考査・実力考査・小テスト等のフィードバックによって、学力の定着を図った。		
	57	実践目標	外国人外国語指導助手や視聴覚教材を有効に活用し、4領域(読む、書く、聞く、話す)の養成に努める。	3.6		
	家庭	58	実践目標	社会の一員として、より良い人生を築くために必要な基礎的・基本的知識・技術を習得し、「生きる」力を身につける。持続可能な社会を形成し、消費者の立場として地域社会に貢献する力を養う。また、新しい生活様式に対応するために、生活の工夫ができる力を養う。	3.5	
			(成果)	SDGSや持続可能な社会の形成を全体のテーマとして組み立て、消費者教育に結びつくように授業を展開することで、当事者意識を持ち、持続可能な社会の実現に向けて貢献しようとする姿勢を養うことができた。基本的な知識や技術の習得を徹底することで、感染症や災害など非常時にも生きる力を身につけることができた。		
		59	実践目標	実験や実習などを通して実践力を育み、ものごとを構成する力や、論理的・科学的な思考を育成する。また、グループワークなどで自分の考えを表現できるようにする。	3.3	
60	実践目標	基礎基本に沿った実習を行い、感染予防対策を徹底しながら、自己完結実習や少人数実習を導入することで、個人の技術の向上に繋がり成果を上げた。テーマによってグループ学習を取り入れ、自分と他者の考えを共有することができた。	3.5			
	(成果)	外部講師の専門的な講義を活用し、将来の生活設計を考える力を養う。また、日本の食文化を実習の中で体得し、伝統文化を育む。				
情報	61	実践目標	情報を科学的に理解させつつ情報及び情報技術の活用能力を高めるとともに、情報社会に参画する態度を学ばせる。	3.2		
		(成果)	JSTの方針「SSH事業の成果の普及」に沿って「問題解決」の視点と「探究活動への接続」を重視して授業を展開した。既に「夏休みに生徒がネット上の問題を起こしたり巻き込まれる事例が発生しにくい」成果が得られている「情報社会に参画する態度」をねらいとした「個人情報・知的財産・情報システム・セキュリティ」等を1学期に指導し、今年度はアクティブラーニング(プレゼン実習等)も実施できた。その後「情報の科学的な理解」をねらいとした論理演算、しくみ、デジタル表現やネットワークの理論や、「問題解決や探究活動」を踏まえた理論・統計的手法を教科書の内容を超えて指導した。指導内容の割に授業時間数の制限が厳しいため十分とはいえないが、情報を礎にした知識・技能・思考判断力の重要度が高まることを踏まえた「情報活用能力」の育成のために、データ分析・モデル化・シミュレーション等のPC活用実習も講義と並行して指導できた。			
総合的な探究の時間(神高探究)の展開と活用	62	実践目標	自らの興味・関心に応じてテーマを設定、探究活動を行うことで探究の方法、考え方、知識等を身につけさせる。また、グループ活動を通して協働性を養い、発表会などを通して外部へ発信するプレゼンテーション能力を育成する。	3.3		
		(成果)	8クラス70グループが興味・関心に応じたテーマ設定をし、探究活動を行った。1学期にプロジェクト探究Ⅰで探究活動の流れをつかみ、1学期末からプロジェクト探究Ⅱを行い、中間発表会、最終発表会などを通して、プレゼンテーション能力を育成した。評価表(ルーブリック)を用いて、生徒に自己評価させ、指導に活用した。			